

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 91 回 さまよえる「日本人」～ワーグナー歌劇「さまよえるオランダ人」もじり

最近、日本を取り巻く周辺で、色々物議を交わしている事件が多い。竹島の領土問題で韓国と、同様に尖閣列島は中国と、拉致事件で北朝鮮、いずれもその根底にあるのは、歴史観、あるいは首相の靖国参拝と、毎日のようにテレビ、新聞は騒いでいる。

しかし、その報道姿勢は、各マスコミごとに微妙に違う。朝日新聞を中心とした、いわゆる「インテリ系」は、あいも変わらず自虐的視点から、何処の国より「日本が悪い」と、一体どこの国のマスコミが分からない論調は、戦後 50 年以上たった今でも、一貫した姿勢である。別の意味で話題の「フジ・サンケイグループ」は、若干ニュアンスが違う。特に産経新聞は、日本が事実として歩んできた客観的歴史観と、関係各国以外の諸外国が、どう評価するかといったバランス性を論説主張に盛り込み、独自の思想を堂々と述べている。

どちらが正当か、いや、今風に言えば、どっちが好きかは、正に千差万別である。このことだけは、北朝鮮や中国、あるいは、歴史観の統一性教育という意味では韓国も同じであるが、とても考えられない、「言論の自由」と換言される「フリーダム」、皮肉的にいえば、平和ボケ社会の真っ只中の日本を象徴している現象である。

戦争をやっていい理屈はどこにもない。にもかかわらず、人間の歴史は戦争の歴史である。その歴史は常に非人道的残虐行為の悲劇を重ねてきた。大切なことは、これからの我々自身と子孫の確固たる歴史観を検証し、二度と悲劇を繰り返さない信念を継承していくことである。中国や北朝鮮、韓国が教えている日本の歴史が、日本人の歴史観と極端に違っていることは、致し方ない。歴史は、事実の一つであっても、解釈はまちまちであるから。でも、そうであるゆえ、分かり合えるチャンスはあるはずである。ここに、将来への展望を見出せる可能性は、十分存在する。

今それ以上に問題は、歴史観をネタに「外交」上の権益を搾取するかの傾向が窺える事ではないだろうか。「外交」とは、自国の権益と国家主権を守ることにある。その交渉の過程には、激しい論戦があり、配慮すべきと、絶対譲れぬ事案があるのは当然、とりわけ、領土問題は、古今東西どの歴史を見ても、譲らないのが当たり前。武力や金銭譲渡以外、領土を平和理に返還したのは、沖縄と小笠原のみが史上唯一の例外である。

「外交」問題と位置付けるのであれば、日本人は、堂々と自国の主張を、いかなる場面でも述べるべきである。「あっちから言われたから、こっちには何と言おうか」、やたらフラフラと、まるで国家主権のない...さまよえる「日本人」...外国から、そんな風に映って見える。Rワーグナーは、何とも、苦笑が止まらないかもしれない。